

## 遺跡発表1. 四街道市

# みなみさく 南作遺跡

—鹿島川中流域に展開した縄文中期の環状集落—

主任調査研究員 小倉和重

### 遺跡の位置と立地環境

遺跡は四街道市成山<sup>なりやま</sup>字腰巻57-3他に所在し、鹿島川の支流によって樹枝状に浸食された標高約30mの台地上に立地している。台地は南西から北東方向に鉤<sup>かぎ</sup>の手状に延びており、北東に向かって先細りとなっている。鹿島川とは直線距離にして500mの位置にあり、現水田面との比高差は約20mである。

平成11年2月1日～同年3月26日

調査面積 11,460m<sup>2</sup>（上層）

検出遺構 住居跡10軒、土坑72基

#### 【平成11年度】

本調査 平成11年4月1日～同年11月29日

調査面積 5,630m<sup>2</sup>（上層）

検出遺構 住居跡3軒、土坑11基、粘土採掘坑4基

### 調査の概要

四街道市成台中土地区画整理事業に伴い、郷野<sup>ごうの</sup>遺跡、権現堂<sup>ごんげんどう</sup>遺跡、笹目沢<sup>ささめざわ</sup>I・II遺跡、浮矢<sup>うきや</sup>I・II遺跡とともに当センターが調査を行なった。上層の本調査面積の合計は、29,070m<sup>2</sup>である。遺跡の時代は、旧石器、縄文、奈良・平安、近世の各時代に及ぶが、縄文時代中期中葉と奈良・平安時代の集落が中心を占める。当然のことながら、縄文時代の遺構は奈良・平安時代を中心とする後世の遺構に破壊されているものもある。調査の概要は下記のとおりであるが、検出遺構は縄文時代についてのみ記す。

なお、今年度中に当事業に伴う追加の調査が予定されている。

#### 【平成9年度】

確認調査 平成9年4月21日～同年4月25日

調査面積 426m<sup>2</sup>／4,150m<sup>2</sup>（上層）

本調査 平成9年7月1日～平成10年3月27日

調査面積 12,000m<sup>2</sup>（上層）

検出遺構 住居跡8軒、粘土採掘坑5箇所、土坑171基（うち土坑墓21基、フラスコ形土坑36基）、ピット800基

#### 【平成10年度】

確認調査 平成11年2月1日～同年2月5日

調査面積 1,210m<sup>2</sup>／3,600m<sup>2</sup>（上層）

本調査 平成10年4月1日～同年7月6日

### 調査の成果

**<集落>** 本遺跡では住居と墓、貯蔵穴等の施設が環状に配置された、「環状集落」という計画的なムラの形態を捉えることができる。小支谷によって浸食された痩せ尾根状を呈する台地中央部の平坦面を中心に、内側から外側に向かって貯蔵穴・墓（一部は貯蔵穴を転用）、住居等の順に配置されている。集落の存続期間は中期中葉後半（阿玉台<sup>あたまだい</sup>Ⅲ～Ⅳ式期、今から約5千年前）のおよそ230年間を中心に、その後、中期後葉（加曾利<sup>かそり</sup>E3式期）にかけて断続的に営まれたと考えられる。

**<住居>** 縄文時代中期に属する住居は、24軒確認されている。ここでは、阿玉台式期の住居形態について概観しておく。本遺跡では、円形基調のものとは大別することができる。前者は不整円形や楕円形のもの、後者は隅丸<sup>すみまる</sup>方形や長方形のものがあるが、とくに方形基調のものが目立つ。この形態は、続く中期後葉の古い段階まで残るが、その後は姿を消してしまうという。

**<フラスコ形土坑>** 断面形状がフラスコ形を呈することからこの名称がある。本遺跡では、約60基確認されている。このほか、土坑墓を含む土坑が約200基確認されている。他遺跡の調査事例から、ドングリ類の貯蔵穴と考えられる。多くの遺跡では住居数に比してフラスコ形土坑が多い傾向にあり、本

遺跡では住居1軒あたり3基の割合となる。このことはドングリ類の貯蔵が積極的に行なわれていたことを示唆している。

一方、こうした土坑の中には、上部から深鉢が逆位で出土したものもある。これは、土坑が貯蔵穴としての機能を終えた後、なんらかの行為に転用されたものと考えられる。他遺跡の調査事例から類推するならば、墓穴と考えるのが妥当であろう。この場合、フラスコ形土坑は次項で述べる「土坑墓」として再利用されたことになる。

**<土坑墓>** 前項で述べたフラスコ形土坑に対し、当初から墓穴として構築されたものである。平面形状は楕円形を呈し、フラスコ形土坑にくらべて規模が小さいことは歴然である。土坑墓からは、遺存度の良好な土器や大型の土器が出土することが多い。このことは、後世の自然作用による流れ込みとは異なり、明らかに人為的に副葬されたものと考えべきものである。人骨を含む土器以外の有機質の副葬品は、酸性土壌のため残っていないと考えられる。

本遺跡では、明確に土坑墓と判断できるものとして、85・86・336号土坑を挙げることができる。85号と336号土坑からは、それぞれ大型の浅鉢と深鉢が、86号土坑からは2点の深鉢が入れ子になって出土した。土器が入れ子で出土するケースは、後期にも見受けられるが、一般的には埋葬（埋納）、霊の封じ込めやモノ送りなど、葬送儀礼に関わる事象と考えられている。

**<粘土採掘坑>** 本遺跡において、唯一晩期前葉（あんぎょう安行3b式期）の土器が出土した遺構である。南東側斜面肩口に分布する。調査範囲内に7箇所確認されたが、形状・規模は一様ではない。現段階では台地上に当該期の遺構が確認されていないことから、粘土採掘のみを行なった作業場とみなしておきたい。粘土は、いわゆる「常総粘土層」と呼ばれる地層に相当し、関東ローム層直下に堆積する粘土層を無秩序に採掘した状況が見て取れる。出土遺物の内容と出土状況からは、縄文時代の後に粘土採掘を行っていた形跡は認められない。

**<土器>** 在地の伝統的な器形や文様を有する土器

群のほか、甲信地方の影響を受けたものや、北陸地方との関係をうかがわせるものも認められる。深鉢や浅鉢には大小さまざまなものがあり、当該期の土器の様相を知る上で豊富な資料を提供している。

北陸地方との関係がうかがえる3号粘土採掘坑出土土器は、印旛地域のみならず関東地方では類例がないものであり、その系譜とともに当時の文化交流を考える上で注目すべきものである。

## 今後の課題と着眼点

**<遺跡>** 鹿島川中流域における中期中葉の集落として、前後の時期を通してどのように人が動いているのかを、周辺遺跡との関係においてとらえる必要がある。

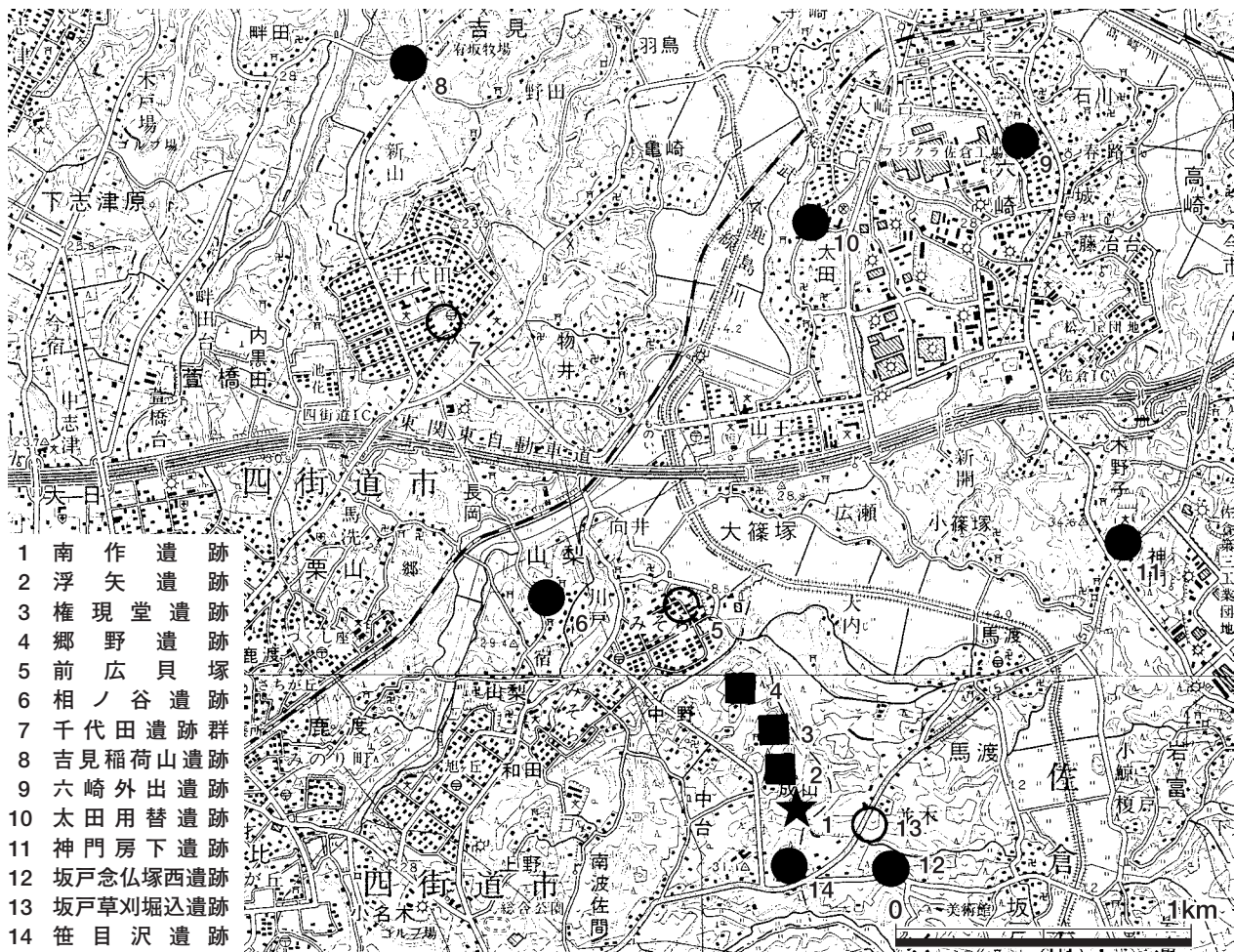
**<集落>** 痩せ尾根状を呈する台地の中央部を中心に展開する集落の変遷を具体的に追求することにより、土地利用の変遷を把握する。また、南東側斜面地で検出された晩期の粘土採掘坑も、集落（居住域）とは別に晩期縄文人の土地利用の実態を探る上で興味深い。

**<住居>** 「有段住居」の性格と集落内での位置付けについて、構造上の分析とあわせ、他の住居や遺跡と比較しながら検討を加える。

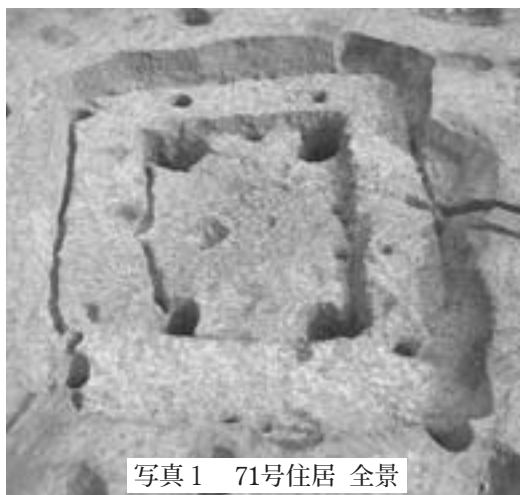
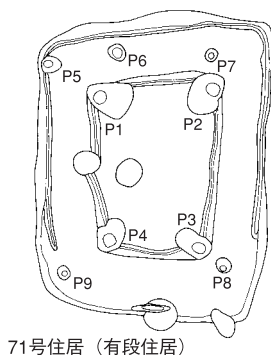
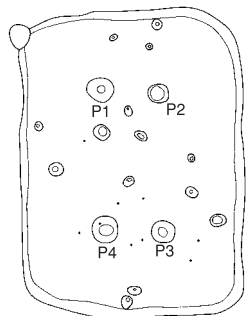
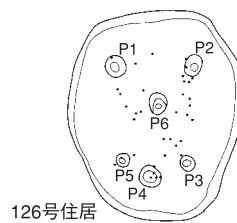
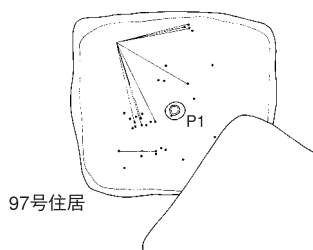
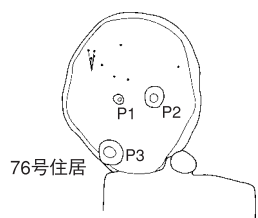
**<遺物>** 土器は器形・文様から異系統の要素を抽出することによって、他地域との文化交流について考えることができる。

具体的には、同時期の甲信地方（かつしか勝坂式土器様式圏）との関係を中心に、上記した北陸地方（しんぼ新保・にんぎ新崎土器様式圏）との関係で考えなければならない土器群が存在する。

また、「土器片錘」と呼ばれる魚網錘ぎょうもうすいが多く出土している。このことは、中期中葉にすでに河川における活発な漁労活動が行なわれていたことを示唆しており、その後、中期後葉（加曾利E式期）の土器片錘を大量に出土する遺跡（拠点集落）との関係において、当該地域での生業活動の内容、およびその変遷について考える必要がある。

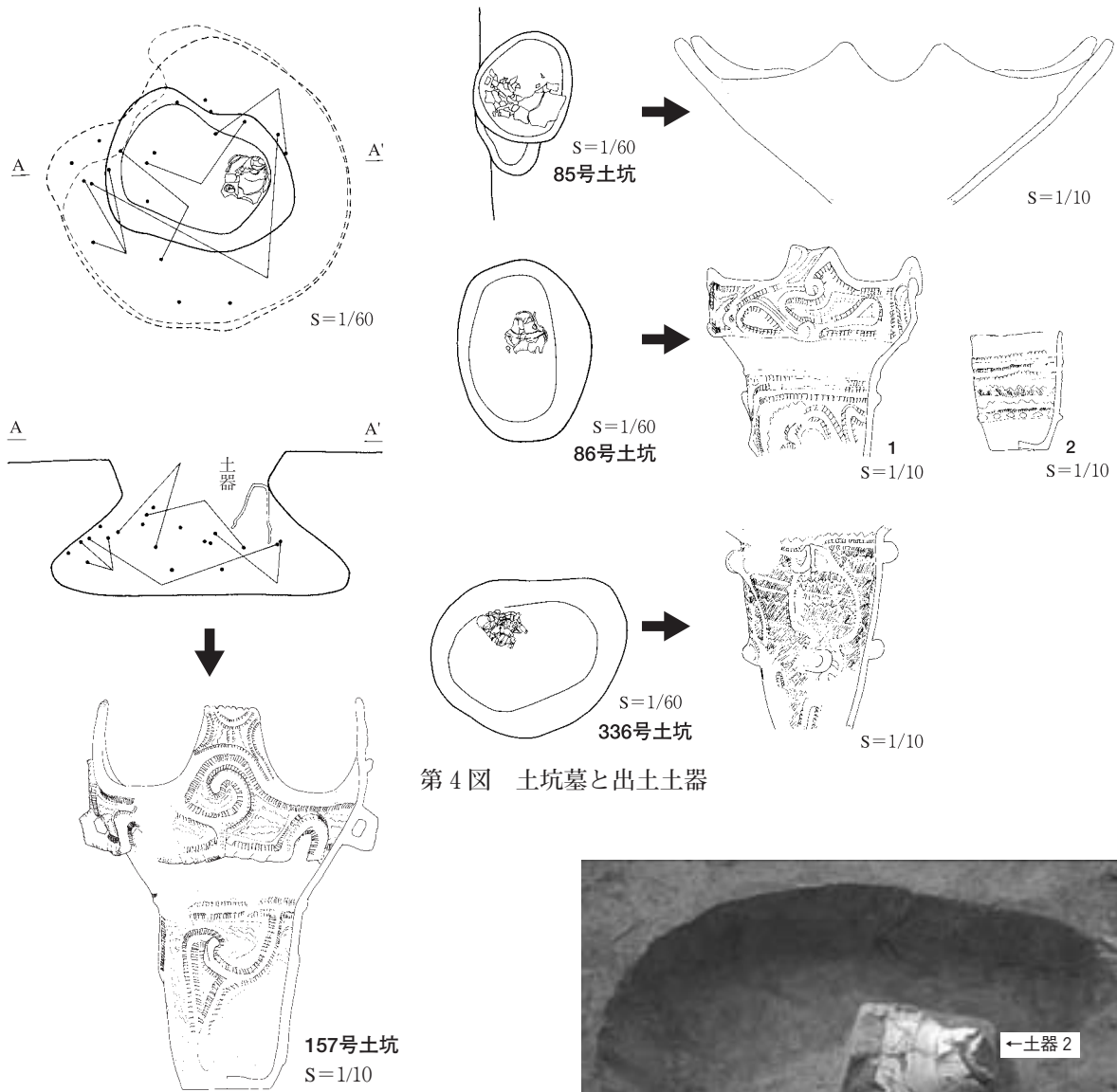


第1図 南作遺跡位置図 (S=1/50,000)



第2図 阿玉台式期の住居跡 (S=1/100)





第4図 土坑墓と出土土器

第3図 フラスコ形土坑と出土土器

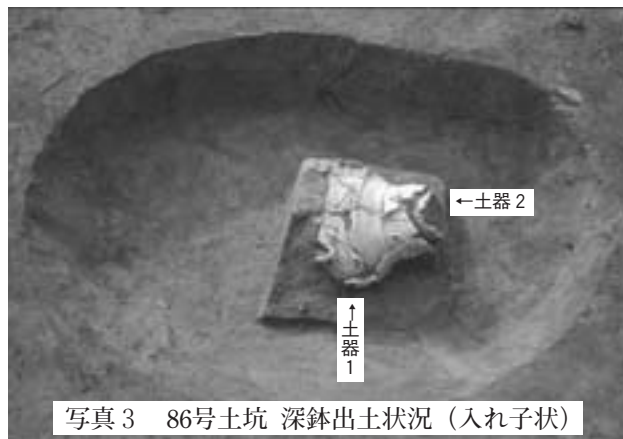


写真3 86号土坑 深鉢出土状況 (入れ子状)



写真2 157号土坑 深鉢出土状況



写真4 336号土坑 深鉢出土状況